



じじょうごい 自浄其意 — 自らその心を浄くすること きよ

ある会食の席のこと、近くにお座りになったある大寺の、根は温かく優しい方であるのに、その照れ隠しか、普段はやや無頼派を気取るご住職が一枚のコピーを私に手わたし、こう申されました。

「先生、この文章をどう思うか。もし先生がいいというなら、この席にいる他の皆にも配ってみようかと思うのだが、配ってもいいもんか…」。

それは、裏千家の千玄室宗匠そうしやうがお書きになった「自浄其意」という文章でした。そのご住職も奥様も長年にわたってお茶に親しんでこられ、宗匠ともお付き合いがあることは存知上げておりましたし、茶道と仏道は、形は違っても、やはりどこかで重なり合うところがあるんだろうなと思ったものでした。短い文章であったので、私は、その場で目を通し、「大変結構な文章ではないですか」と、そう申し上げました。

そこには、次のようなことが書かれていました。

お釈迦様の最期を看取った阿難あなんというお弟子さんにある人が「お釈迦様の教えで何が一番大事なのか」を問うたところ、阿難尊者そんじゆが挙げたのが「自浄其意（自らその心を浄くすること）」の教えであったということです。

阿難という方は、釈尊しゃくそんの十大弟子に数えられる人物ですが、「知恵第一」といわれ、有名な「般若心経」の中で観自在菩薩（観音様）の説法を聞く役回りを演じるモデルとなった、同じ十大弟子の舍利弗しゃりほつ（舍利子）やその親友の目連もくれんのような大秀才とは違って、時々お釈迦様に愚問を發して諭されるような愛すべき人物でしたが、長年にわたり仏陀の身の回りの世話をし、殊の外可愛がられ、師の最後の旅まで連れ従ったお弟子でした。

因みに、「目にするもの何もかもが美しい^{*}」と語ったといわれる仏陀最晩年の言葉は、この旅の後半に出てくる有名なエピソードですが、芥川龍之介さんは、遺稿『或旧友へ送る手記』の中でそれを「末期の眼まつごのめ」と表現しています。川端康成氏も、これに甚く刺激されたようで、後年『末期の眼』という随筆をものにし、この言葉をノーベル文学賞の記念講演『美しい日本の私』の中でも取り上げていました。

私がお世話になった仏教学の稲津紀三先生は、「むしろ、仏陀の弟子に秀才たちばかりでなく、阿難さんのような方がいたので、仏陀の教え（仏教）を私たち一般人により近いものにしてくれたんだね」とおっしゃったことがありましたが、何事につけ秀才ばかりでなく、十分理解が行き届かない学生にも丁寧に説明しようと努めることによって、先生もまた、その事柄の実相をハッキリと掴み取り、その本質をより鮮明に浮かび上がらせることが出来るようになるものです。難しいことを難しく語ることは、二流の学者に出来ることで、しか

し本当に解っている人でなければ、易しく語り尽くすことは出来ないものです。

千師は、「なんでもないような教えですが、父母より少年期の頃、此の御話を伺い、心が何か浄められたことを覚えています」と、更に「今時の政治家や経営者、トップリーダーがこのような心得を持ってくれるかと思ひ思います」と続けておられました。

牧師の子として育ったニーチェは、きっと内側から教会を見過ぎたからか、成長した後、『反^{アンチ}キリスト者』というキリスト教批判の本を書き、その中でむしろ仏教を高く評価し、仏教は、フィクションとして仮構された「神の国」や有りもしない「最後の審判」などを説きはしない、ただ「仏陀は、心を平静にする、あるいは晴れやかにする想念だけを要求する^{※※}」とっていますが、キリスト教が果たしてニーチェのいう通りか、ニーチェが仏教の全体像を正確に理解していたかどうかは兎も角、天才思想家らしく、その本質を直観的に捉えてはいたのでしょうか。

ともすると、私たちは、自らその心を曇らせ、物事を歪めて、在るがままの真実を見失うところがあるものです。私の祖父がよくこういうことを申しました。「正直に生きることが一番楽な生き方なのだよ。人間は、不正をすると、これを誤魔化し、辻褄合わせをしようとして、無理矢理理屈を探し回り、却って自分を苦しめることになる、愚かなことだ」と。

※中村元や高下恵は、人生の最後に至って、いまさらながらこの世の美しさと人間の恩恵にうたれる、それがまた人間として釈尊が辿り着いたありのままの心境であったと解説している。

参照：中村元著『ゴータマ・ブッダ 一釈尊伝』法藏館、高下恵著『釈迦 一生涯と弟子』百華苑

※※『アンチキリスト』（全集第4巻）西尾幹二訳 白水社

[>前のページへ戻る](#)